



■**容器包装プラスチック使用量削減**

2023年は、第四次自主行動計画の目標42%^{*1}以上削減継続に対し43.2%削減

■**再生樹脂、バイオマス樹脂の使用拡大**

■**界面活性剤について、河川水モニタリングと生態系リスク評価**

2023年も、問題ないレベルであることを確認

日本石鹼洗剤工業会(会長・宮道 建臣/日油株式会社 会長)は、2021年発表の第四次自主行動計画(主要5製品群^{*2}で2030年までに1995年比42%以上の削減継続、バイオマスおよび再生樹脂を使用した容器包装を2020年比5倍以上)を進めています。このたび、計画3年目の2023年は、当工業会対象の主要5製品群^{*2}で、それぞれの目標に対して43.2%削減と2.9倍のバイオマスおよび再生樹脂使用の実績でした。継続して、製品ライフサイクルを対象とした環境配慮設計チェックリストの活用を進めてまいります。

また洗剤の生態系(環境)への影響に関する調査(1998年から継続的に実施)として、国内4河川で主要な界面活性剤4種の濃度を測定し、2023年度も環境への影響に問題のないレベルであることを確認しました。

なお1995年から29年間の容器包装プラスチック使用量の推移ならびに、1998年以降の主要な界面活性剤の過去26年間の環境モニタリングの結果は、『環境年報 Vol.49(2024年度版)』にまとめて掲載しています。

当工業会は、環境に配慮した活動に、さらに努めてまいります。

*1 製品出荷量あたりのプラスチック使用量(原単位)、1995年比

*2 主要5製品群: ①洗濯用液体洗剤 ②柔軟仕上げ剤 ③台所用洗剤 ④住居用洗剤 ⑤漂白剤・かびとり剤

【1】製品出荷量あたりの容器包装プラスチック使用量(原単位) 1995年比43.2%削減を達成

プラスチック使用量削減・取り組みの背景

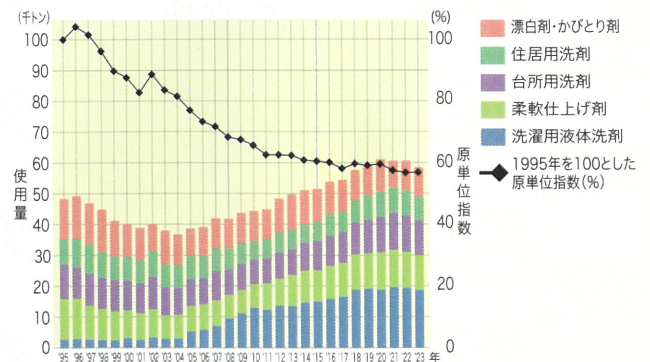
当工業会は、1995年より容器包装プラスチックの使用量に関して業界全体での実態把握を行うとともに、会員各社において使用量削減に努力してまいりました。

2006年には、製品出荷量あたりの容器包装プラスチック使用量(原単位)を2010年に1995年比で30%削減する第一次自主行動計画を策定し達成。また、2015年に削減目標を40%とした第二次自主行動計画を策定し達成。2020年に削減目標を42%に引き上げる第三次自主行動計画を策定し達成。そして2021年に第四次自主行動計画(主要5製品群^{*2}で2030年まで1995年比42%以上の削減継続)を策定しスタートしました。

2023年容器包装プラスチック削減実績

2023年における当工業会対象の主要5製品群のプラスチック使用量は、58.4千トンで、前年より3.6%減少、また、1995年との比較では21%増加しています。当工業会の自主行動計画の目標基準である「製品出荷量あたりの容器包装プラスチック使用量(原単位)」で見ると、2023年は、42.5kg/トンで前年とほぼ同等、1995年比で43.2%減となり、製品出荷量に対し相対的に十分低く抑えられています。その削減率は前年43.3%とほぼ同等であり、2021年に制定した第四次自主行動計画の目標を達成するに至りました。この活動を継続維持するため、当工業会は容器包装プラスチックの使用量削減にさらに努力していきます。

■プラスチック使用量と原単位指数(主要5製品群)



バイオマス樹脂及び再生樹脂を使用した容器包装

第四次自主行動計画で掲げた目標である、バイオマス樹脂および再生樹脂を使用した容器包装を、2030年までに2020年比で5倍以上にする目標を設定し、2023年は約8千トンのバイオマス樹脂および再生樹脂を含むプラスチックが使用されました。この値は2020年の使用量に対して2.9倍の値となり、目標5倍に向けて順調に増加しております。バイオマス樹脂および再生樹脂の活用拡大について、引き続き注力するとともに、目標の再設定も検討していきます。

環境配慮設計チェックリスト(ガイドライン)の活用(継続)

当工業会は、第四次自主行動計画に基づき、環境配慮チェックリストに4Rの視点、また、温室効果ガス排出削減等の視点をわかりやすく記載し、具体的な実践例も付け加え、一昨年12月にガイドラインとして公開し、活用を継続しております。

容器包装プラスチック使用量の新たな削減事例集を公開

当工業会では、容器包装プラスチック使用量削減の具体的な事例を会員各社から集め、会員社のみならず業界を越えて参考にしていただきたいと考え、従来からホームページに公開しており、12月20日に新たな事例を追加しました。容器包装プラスチック使用量削減の一助となればと考えています。

【2】洗剤成分の生態系影響に関する評価結果

当工業会では、洗剤の生態系(環境)への影響に関する調査を1998年から継続的に行なっています。代表的な界面活性剤として、LAS、AE、AO^{*4}について、関東および関西の4河川^{*5}で、年4回の濃度測定による環境モニタリングを実施しています。さらに2012年からは、柔軟仕上げ剤基剤として用いられているTEAQ^{*4}のモニタリングを開始しました。

*4 LAS：直鎖アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム AE：ポリオキシエチレンアルキルエーテル
AO：アルキルジメチルアミノオキシド TEAQ：トリエタノールアミン4級塩

*5 多摩川、荒川、江戸川、淀川の4河川7ヶ所
(家庭排水が流入する可能性が比較的大きいと考えられる代表的な都市周辺河川。)

<界面活性剤の環境モニタリング結果と生態系リスク評価>

LAS、AE、AO及びTEAQの予測無影響濃度(水生生物への影響が現れないと予測される濃度)は、それぞれ270 μ g/L、110 μ g/L、23 μ g/L、及び43 μ g/Lであることが既に報告されています。

2023年度の環境モニタリング結果は、1998年度～2022年度と同様に低い濃度を維持しており、それぞれの環境濃度は予測無影響濃度を下回っています(下表)。したがって、調査対象の河川においては、界面活性剤による生態系リスクは小さいと考えられます。

■界面活性剤の環境濃度と予測無影響濃度の比較 (単位： μ g/L ND：不検出)

項目		LAS	AE	AO	TEAQ
河川水濃度	2022年度 モニタリング結果 (最小値～最大値)	0.21 ～6.2	ND (<0.001) ～0.89	ND (<0.01) ～0.010	ND (<0.0012) ～2.7
	調査最大値 (98年度から21年度)	110	45	3.1	24
予測無影響濃度		270	110	23	43

(各界面活性剤の全対象成分が検出下限値未満の場合はND(不検出)と記載)

日本石鹼洗剤工業会は、製品をお使いいただく皆様にさらなる安心をお届けできるよう、科学的調査・研究活動に今後とも積極的に取り組み、情報の開示に努めてまいります。

*この資料は、重工業記者クラブに配信しています。

*問合せ先：日本石鹼洗剤工業会 https://jsda.org/w/00_jsda/labour_1.html